

転校にあけくれた小学生時代

藤沢市支部 大久保 初枝（子）

戦没者 大久保 謙治

戦没地 フィリピン

私は横浜市中区本牧の生まれ、昭和十九年この地の小学校に入学しました。

この年から本土攻撃がひどくなり、五月頃より学童疎開が始まり、三年生以上は強制的に集団疎開、二年生迄は小さいので縁故疎開、私は一年なので母方の里（埼玉県越生町）に縁故疎開させられました。食糧はすべて配給制、主食に麦や小麦、玄米が配給され、その玄米を一升瓶の中に入れ竹の棒でつついて少しでも白くして食べました。

東京に近い埼玉県越生でも、授業中、警戒警報が鳴ると防空頭巾を被り、米俵の蓋を持って裏山の杉林の中に行きました（米俵はワラで編んだもの）、此処でも夜、警戒警報が鳴ると電灯に黒いカバーを掛け、光が外に漏れない様にして不安な夜を過ごしました。

祖母の家では田圃が無いので麦やあわ、さつま芋を作り、その芋を乾燥芋に、秋には庭の五本の柿の実を干し柿にし、米に換えていた様でした。甘い物が無いので、むいた柿の皮を石臼で粉にして焼き餅に入れたり、さつま芋を蒸したり、茹でたりして食べました。

昭和二十年、我が家は五月二十九日の横浜大空襲で丸焼けとなり、後で母から聞いた話です。隣に焼夷弾が落ち、弟をおぶって頭から水に濡らした布団を被り、本牧から県庁のある山下町に逃げたそうです。途中二つの橋を渡り、後ろを振り返ると今渡った先の橋が炎に包まれていて恐ろしい思いだったと聞いています。火が治まったので我が家に戻って来てみると防空壕から真っ黒な煙が出ていて、どうすることも出来なかったそうです。

東京の親友で集団疎開から学校に帰ってきて、親達を引き取りにくる中で、親友は夕方になっても親が迎えに来ないので心配になって先生に調べて貰うと両親が三月十日の浅草戦災で死亡して迎えにこれない事が判り、途方にくれたそうです。悲しい現実があります。

戦争は終わりましたが昭和二十一年三月まで、食糧難のため越生におりました。

新学期から父方の叔父（長男）の疎開先の兵庫県朝来郡新井町（姫路城のある姫路から播但線で日本海側の城崎へ向かう途中の町）に移りました。この時、藤沢から兵庫迄の列車の切符が列車本数が少ない事と利用者が多かった事で入手困難だった。やっと切符を入手、列車が東京―横浜―小田原と進み、混んで窓から乗り、トイレに行く事も出来ず女の私でも子供だから窓から外に出して貰い停車駅のホームの隅で済ませた事は今でも忘れられません。

家庭の事情により、三学期から、また神戸市灘区の六甲山の麓の町に移り、この時、紙が不足していて新聞紙の教科書でした。学業も田舎とは違って進んでいて大変苦労し、又いじめにもあい、辛い思いをしました。この後、神戸でも食糧難で三人の居候は食べさせられないとの事で私一人が横浜の叔父の家に引き取られました。（転校四回目）

昭和二十三年正月、やっと藤沢市で親子三人で暮らせる様になりました。依然として食糧難でした。